

★ 神戸市・リガ市姉妹都市提携35周年記念式典 ★

矢田神戸市長がリガを訪問 リガ市民の歓迎を受けました 2010年5月18日～19日 リガ市にて



メテオラ公園（リガ市） 35周年記念プレート除幕式にて ウシャコフス市長と矢田市長

【矢田市長のスピーチ】

ウシャコフス市長、シュレセルス・リガ市副市長、リガ市の皆様、このたびは、60名を超える神戸市訪問団を大変温かくご歓迎いただき、心よりお礼申し上げます。本来であれば昨年5月にリガ市を訪問させていただくことになっておりましたが、新型インフルエンザの世界的な流行のため、直前に訪問を差し控えさせていただくこととなりました。神戸市訪問団の受入準備にご尽力されたリガ市の関係者の皆様にご迷惑をかけることになりましたが、本年は、こうして、貴市との友好交流に尽くしてまいりました方々とともにリガを訪問が実現できましたこと心より嬉しく思っております。

神戸市とリガ市は日本とラトビア両国間における最も古い姉妹都市として、1974年に姉妹都市提携して以来35年間にわたり、芸術・文化、スポーツ、動物交換、経済など様々な分野で、幅広く、また深い交流を続けてまいりました。

2008年11月には、60名を超えるリガ市の各界を代表する方々を神戸にお迎えし、ヴァイヴァルス駐日ラトビア共和国大使や東郷在大阪ラトビア名誉領事のご尽力もあって、芸術展や行政、ビジネス関係のセミナーやコンサートなど幅広い交流を行うことができました。本年はリガ市において、神戸紹介展を始めとする様々な記念行事を通じて、リガ市民の方々と交流を深めることを大変楽しみにしております。

また、このたびの訪問では、神戸市混声合唱団と国際的な合唱団である「アヴェ・ソル」との協力提携や、日本庭園「神戸園」建設への第一歩となるモニュメントの設置などが予定されており、大変実りのある訪問になることを期待しております。また、神戸は、昨年10月にユネスコの創造都市ネットワークのデザイン部門に指定されましたが、リガ市には「バルトの真珠」と謳われ、世界遺産にも指定されている美しい街並みが保存されており、デザインを活かしたまちづくりという点におきましても、将来的な交流の可能性が大いにあるのではないかと考えております。

このたびの私どもの訪問が、両市の交流の新たな出発点となることをお祈りしまして、私からのあいさつとさせていただきます。

【ニルス・ウシャコフスリガ市長のスピーチ】

神戸市訪問団の皆様、リガ市関係者の皆様！

神戸市とリガ市の35年にわたる友好交流を記念するイベントとして、リガ市では「神戸の日」を開催いたします。日本とラトビアは、距離にすると遠いですが、共通している要素が数多くあります。そのひとつは、海であり、また一年を通して繰り返す四季模様です。冬の後には春が来、次いで夏、そして秋が訪れます。この四季の移り変わりを、リガの人々は公園のなかに見ます。

リガ市は、ヨーロッパの都市のなかでも、緑が豊かな都市として評価されていますが、近い将来に新たな公園の建設がひとつ予定されています。リガ市のパールダウガワにあった「メテオ公園」は、このたび新しく「神戸園」として生まれ変わります。神戸庭園は、日本とラトビアの庭園専門家が協力し、力をあわせて手掛けられます。日本庭園に不可欠な要素―木、石、水などは日本の様式に則って設計されます。完成の暁には、両市の友好のシンボルとして、リガ市民が気軽に訪れ、心から楽しめる公園になるよう願っております。

関西日本ラトビア協会では、神戸市リガ市姉妹都市提携35周年記念式典参加のため、東郷名誉領事はじめ18名の有志がラトビアを訪問しました。木村さんと寺岡さんの二人にその模様を寄稿いただきました。

【ラトビア訪問記 その1】 木村宗光さん（関西日本ラトビア協会会員）

2010年5月17日（月）出発 関西国際空港11：00発 フィンランド航空（Finnair）ヘルシンキ行きに乗る。このFinnairの日本乗り入れは1983年と意外に古いが、この航空会社は定時出発で信頼を得ているようだ。到着機材を一泊させてから出発させるため以前はその様なヨーロッパ便は無く遅れるのが当たり前だったらしい。ヘルシンキまでは10時間弱でヨーロッパへは一番早くそれほど苦にならず行く事が出来たのだが、ヘルシンキのビンター国際空港でとんでもない目に会うことになる。スローモーで不必要なまでのセキュリティーチェックとパスポートチェックで一時間以上掛る始末で一同カンカン。気が短くなった高齢者には我慢ならない。それでもその日の夕方の明るい内にリガに着く事が出来、宿泊先のアバロンホテルにチェックイン。全員で夕闇のリガをそぞろ歩き。食事と自慢の地ビールが疲れを忘れさせてくれました。まあ多少トラブルが有る方が旅は面白いものである。



5月18日（火）リガ初日 O35周年記念式典

ドイツ人の商人と聖職者により12～3世紀に築かれた街でドイツよりドイツらしいと言われているらしいがラトビアの首都、リガは人口80万人の街で1997年に世界遺産に指定された。どんな街か期待が高まる。

この日は神戸市リガ市姉妹都市35周年記念式典のためリガ市庁舎へ。ウシャコフス市長、矢田市長による挨拶に始まり両市長と東郷名誉領事によるテープカットが行われた。市役所一階ホールには神戸の紹介パネルが展示されている。



○ラトビア投資開発公社のプレゼンテーション

ラトビア投資開発公社の長塚徹氏によるラトビアの産業、製品、についての紹介が行なわれる。



長塚氏(左) オゾルス長官(右)



長塚氏とラトビア投資開発公社の皆さん

○リガ市内観光

ブラックヘッドのギルド Melngalvju Nams

ブラックヘッドは、旧市街に位置する 1334 年に建てられた建物で、1941 年の空襲で破壊されたが、リガ創設 800 年を記念して 1999 年に再建された。建物の壁面には 1334 と 1999 の数字が記されている。数々の彫刻で装飾された外観は独特のものとなっている。大時計とともに、ハンザ都市（リガ、ハンブルグ、リューベック、ブレーメン）の 4 つの紋章、ギリシャ神話に登場する神の像などが壁面に置かれている。何世紀もの間この建物はブラックヘッドのギルドという名で、ギルドの家として商人によって使用されていた。



○リガ大聖堂 Riga Domes

リガ大聖堂は、13 世紀に初めの教会が建てられ 18 世紀には現在の形になったもので、大聖堂を有名にしているものの一つに 1884 年に設置されたパイプオルガン 6718 本のパイプ 124 本のストップを持つ有名なもの。建築様式もロマネスク、ゴシック、バロックと様々な様式が見られます。



○聖ペテロ教会 Sv. Petera Baznica

1209 年に建てられた石造りの教会。リガ旧市街で最も高い建物(123.25m)街のシンボルである。14~15 世紀に根本的に改築され、17 世紀末、西側の外観が改築、バロック様式の彫刻で装飾された入り口が作られ現在の姿となった。教会の前には「ブレーメンの音楽隊」のブロンズ像があるが姉妹都市のブレーメンから送られたもので、ロバの鼻を触ると幸せになれるそうだ。この聖ペテロ教会は 72m の高さに展望台がありエレベーターで昇りリガの町を一望した。

○ ユーゲントシュティール建築群

ユーゲントシュティール（アール・ヌーヴォー）は19世紀後半～20世紀初頭にかけてドイツに起こった建築の新様式運動。リガのアルベルタ通りを中心とする地域には、ユーゲントシュティール建築物（集合住宅）が多く残っている。



○夕刻は、神戸市混声合唱団によるコンサート

ブラックヘッドで神戸市混声合唱団による合唱が行われた。

○引き続き、リガ市長主催歓迎レセプション

リガ市長の歓迎の挨拶に続き、矢田神戸市長の挨拶で始まる。長内駐ラトビア大使、東郷名誉ラトビア領事、藤原神戸市議会副議長、神戸市混声合唱団他日本側随員が出席し、ワインとチーズ、そして話に聞いていたより多くの料理を楽しみ、ラトビアでの二日目の夜を和やかに過ごした。



5月19日(水) リガ 2日目

○Vermanes 公園での桜の記念植樹

日本から送られた桜の苗の記念植樹が行われた。リガ市のTAS旅行社が創立20周年を記念してリガ市内の公園に桜の木の植樹式がありました。この会社は、2007年に天皇がラトビアを訪問された際に桜の木の植樹式に関わった会社です。今回は天皇陛下が植えられた桜の木の隣に3本植樹しました

○メテオラ公園にて 神戸園プレートの除幕式

メテオラ公園に神戸園の名前で日本庭園が作られる。ここを神戸園と命名した。どのような日本庭園が出来るか楽しみである。リガ市長、神戸市長の挨拶の後、両市長、大使、東郷名誉領事によるプレートの序幕が行われた





○神戸市、リガ市混声合唱団ジョイントコンサート(於:聖ペテロ協会)

神戸市混声合唱団とリガのアヴェ・ソル合唱団が姉妹合唱団としての調印式が行われました。両合唱団による教会のホールでの歌は雰囲気と残響効果により素晴らしい出来栄であった。合唱はこう言った宗教的背景で育ってきたのであろう。

○神戸市長主催のレセプション風景



5月20日(木) リガ 3日目

○ルンダーレ城 (RUNDĀLES PILS) リガから南へ80 km。バスで約1時間強、車窓からは農場、牧場、白樺や松の森林が一面に広がります。そんなバウスカ市の農場の中にルンダーレ城があります。バルトのベルサイユとも言われる18世紀半ばの宮殿で、バロック・ロココ様式の素晴らしい建築物です。このルンダーレ城は、サント・ペテルブルグの冬の宮殿を設計したイタリア人建築家フランシスコ・バルトロメオ・ラステレリの作であることで有名です。ロシアのアンナ女帝の寵愛を受けたクールランド大公のエルンストヨハンピロン侯爵が、夏の宮殿として建てたものです。

1812年、戦争によって宮殿は略奪され1822年に修復されましたが、第1次世界大戦でまた破壊されました。再建は1933年に始まりましたが、第2次世界大戦によって中止となりました。1940年、穀物倉庫が宮殿の中に設置され、湿った穀物が寄せ木細工の床の上に直接貯蔵されるなど荒れ放題でした。ルンダーレ城の修復は1972年に本格的に始まりました。宮殿全体は60ヘクタール以上の土地で、1、2階に138の部屋があります。1階にはギャラリーと2つの階段の吹抜けがあり、「小さなギャラリー」とともに建築家ラステレリの初期のスタイルのものとして保存されています。最も華麗な部屋は、白の間と呼ばれる舞踏会場で、白い漆喰のレリーフがあり、気分を高揚させるような素晴らしいものです。ほかにバラの間と前皇帝の部屋であり、公の戴冠式が行われた黄金の間、四方の壁に人造大理石と金箔、天井にはフレスコ画。その装飾に目を奪われます。奥には陶磁器の間があり、東洋の陶磁器の中には古伊万里もおかれています。今では毎年夏にバロック音楽フェスティバルが開催されたり、パーティーなどに使用されているそうです。



○東郷名誉領事主催レセプション



【ラトビア訪問記 その2】 寄稿「ラトビア旅行記」 寺岡 志郎さん(関西日本ラトビア協会 監事)

2008年9月に関西ラトビア協会が設立され、私も会員として入会いたしました。今回は神戸・リガ市姉妹都市提携35周年に合わせて協会からも行事に参加することになり私も訪問することになりました。その一番の理由は入会してラトビア国に一度行って見ようと思っていましたが、そのきっかけは、昨年6月から領事館で行なわれている月2回のラトビア語教室です。最初はチンプンカンプンの言葉も美人のリンダ先生の根気強い指導で、少しは会話を覚えたので、習った言葉を現地で使ってみたいという願望でした。

私は協会の訪問旅行の後、一人残りリガ市内のキッチン付のアpartメントを借りて約1ヶ月の現地での生活を始めました。現地では上野さんの紹介で通訳のエレナさんの娘さんに週3日(月水金)、1時間の会話を習い始めました。そして会話のない日はバス、電車を使ったの各地の観光地を巡ってきました。ラトビアのリゾート地、ユルマーラ海岸、この海岸から一つ入った通りは木立の中に大型別荘が立ち並び日本の軽井沢を思わせる風景、古城のあるスイグルダ、ツェーシス、西側の大西洋に面した港町、リエパーヤ、バルチック艦隊が出港した港町で有名です。今でも軍港として使われているようです。



Jūrmala の海岸と別荘

港町ヴェンツピルスはハンザ同盟で栄えた町で騎士団の城跡を見てきました。町には牛のモニュメントが数々の町でした。



Ventspils の牛のモニュメント (足元のリュックは大きさが分るように)

最後の週末はロシア国境に近いレーゼクネも訪問してきました。また23日の夜からの Līgosim Rīga 祭(夏至のお祭り)を夜中まで楽しんできました。日本の昔の夏祭りを思わせる賑わいで歌と踊りと屋台、キャンプファイヤーの様に火が焚かれ朝まで続いていたようです。

それと、隣国の首都、タリン、ヴェリニユスにも朝7時のユーロバスで3~4時間かけて日帰り観光もしてきました。3都巡り完了です。



夏至のお祭り



この明るさで夜の11時過ぎです

ラトビア国内での生活では残念ながら、現地の人は私のような東洋人には英語で応対してくれるのでせっかく習ったラトビア語もあまり日の目を見ませんでした。長距離バスの中で、隣に男の子が座ったので、「Ka jūs sauc?」と聞くと「アレキサンドロ」と教えてくれました。後は市場での買物、地方でのバス、電車の切符を買う時や場所を聞く時には多少のラトビア語が通じたので何となく嬉しい気分になりました。これからもラトビア語を続けてもう少し会話を楽しめればと思っています。

余談ですが、市内バスで、検札に引っかかり、通常の10倍の料金を取られました。わたしの罰金を受け取るとすぐに降りてしまいました。その経験で地方の電車に乗った時もすぐに検札が来ましたが、早めにスタンプを押していたので、被害なし、その時も検札員はすぐ降りていきました。皆さん電車、バスに乗る時はご注意ください。



6月23日の祭りの案内板



祭りのクリスマスツリーが建ちました



民族衣装の女の子たち



Liepaja の駅と港



港には小さいけど軍の船が停泊していました



Cēsis の古城



Sigulda の古城

★関西日本ラトビア協会新年会 スグリテ姉妹を囲んで★ 2010年1月24日



バイバ・スクリデさん（ヴァイオリン）、ラウマ・スクリデさん（ピアノ）のお二人は、ラトビアの首都リガの音楽一家の3姉妹の次女と三女に生まれ、11歳のころから様々なコンクールに参加して輝かしい成績を上げて以来、今日では国際的なアーティストとして活躍中です。今年1月23日に東京、24日に大阪梅田のザ・フェニックスホールで素晴らしい公演を行った後、JLSKの新年会にゲストとして参加していただき、会員の皆さんと楽しいひと時を過ごしました。



ラウマさん（左）バイバさん（右）



懇親会風景



会員の皆様



スクリデ姉妹を囲んで

★ インツ・ダールデリス ラトビア共和国文化大臣を囲んで懇親会★

ラトビア共和国の文化大臣が来日、東郷名誉領事夫妻と懇親会を行いました

2010年1月29日



ダールデリス文化大臣
1971年生まれの若きリーダーです

ラトビア国立交響楽団は、リガを本拠地とするオーケストラで1926年の創設以来すでに100年近い歴史を有するヨーロッパでも有数の楽団です。団員の多くはギドン・クレーメルやミシヤ・マイスキー等の世界的音楽家も学んだリガのエミルス・ダルツィンス音楽学校出身で、現在100人の団員を擁しています。過去に日本で数多くの公演を行ってきました。今回の公演は、指揮者西本智美さんとの共演で、1月29日に大阪のシンフォニーホールにて多くのクラシックファンを魅了しました。

ダールデリス大臣は、かつてこの楽団のクラリネット奏者で2006年から2009年までは音楽監督を務めておられました。今回は楽団員の激励を兼ねて、日本とラトビアの文化交流のために日本を訪れました。公演終了後は、東郷名誉領事夫妻と楽団員の皆様と一緒に和やかに食事をご一緒しました。

祝！★ブリギタ・バイバ・クルーミニャさんが日本政府から勲章を授与されました★
長年にわたる日本語教育と日本文化の普及、ならびに両国間の友好活動への貢献に対して
2010年6月9日



6月9日、日本大使公邸で勲章が伝達されました



旭日双光章

今年のおが国の「春の叙勲」で、おとし大阪の名誉領事館を訪れた、ラトビアの日本語文化スタジオ「ゲンゴ」経営者のブリギタ・バイバ・クルーミニャさんに、旭日双光章が授与されました。

今年は65人の外国人が授章となりましたが、ラトビアからはカッタイ先生（神戸市とリガ市の姉妹都市提携の立役者）に続き二人目だそうです。この叙勲は、これまで長年同人が取り組んできた、日本語教育の振興、日本文化紹介事業を通じ、対日理解の増進及び日・ラトビア間の架け橋となる人材の育成に大きく貢献した功績に対し授与されるものです。おめでとうございます！

以下に地元の報道記事を在ラトビア日本領事館のご配慮により紹介させていただきます。

【2010年6月14日付け「テレグラフ」紙 第8面文化欄から引用】（資料提供：在ラトビア日本大使館）

「パンケーキ」で祝うセレモニー ラトビア市民が旭日双光章を受章

アンドレイ・シャヴレイ記者

ここ数日、ラトビアでは、日本語文化スタジオ「ゲンゴ」所長のブリギタ・クルーミニャ女史のイニシアチブで、独特な日本文化紹介事業が行われている。

同事業は、偶然にも他のイベント・クルーミニャ女史に対する日本のハイランクの勲章の授与と重なることとなった。しかし、人生において偶然というものはあり得ないと言われているのだが。

【言語学者であって、女好きではない】

クルーミニャ女史が日本語や日本文化に興味を持ち始めた物語は、ありきたりのものではない。かつて彼女はリガの映画スタジオで働き、ラトビアの記録映画の製作に携わったり、ラトビア語版の有名なアニメーション映画「38羽のオウム」では尾長猿役を、「くまのプーさん」のピグレット役をの音声吹き込みを行ったり、「テアトル」、「白夜色のリムジン」など、著名な映画作品に出演したりした。

90年代初めには、同映画スタジオは女史に、ぜひ長生きして欲しいと伝えたほどの活躍だった。「状況は、全くひどいものだった」と、いつものエネルギーで意志の固い、そして楽観的で明るいブリギタが本紙に語ってくれた。

「まったく偶然に、私は文通である日本人と知り合いました。彼は、言語学者であって女好きではありませんでした。彼が漢字を使って手紙を書いてくれるのが非常に興味深かったのです。もうかれこれ相当の年月が経ちましたが、こうして私は日本語の勉強を始めました。

日本へ行ってきて、心からこの国のことを好きになりました。」あらゆる意味で、ブリギタの身に起きた出来事は、何か真に日本的なものを思い起こさせる。つまり、自己の運命の最も困難な時期に、またすでに青年時代からは遠い年齢となって、困難を乗り越えようとし、困難にめげることなく新しい段階へと進んでいく女史の人生である。

【ラトビアのサムライ】

1992年、ブリギタは、独力で日・ラトビア語辞典を編纂した。「今でも完璧に日本語をマスターしたとは言えないが、その基本は完全に教えることが出来る。」こうクルーミニャ女史は答えた。「ラトビアには、日本語を完璧に知悉した人が一人だけいた。それは、ニコライ・ヨシフォヴィチ・コンラードという人物である。

彼は、1891年に生まれ、1912年に渡日。祖国に帰国後はスターリンに『感謝されて』ラーグりに送られた。ラーグリから出た後、コンラードは、『スターリンに感謝している、なぜなら彼のおかげで酒を飲むのもタバコも止めたのだから』と言ったといわれている。まったく、彼こそ本物のサムライだ。

【北海道から沖縄まで】

勲章受賞後の日曜、ルンダーレ城において、勲章を身につけたブリギタの主催で、「北海道から沖縄までの日本の自然」というプロジェクトのプレゼンテーションが行われた。

同プログラムは、今日、スィグルダの Baltais fligelis (音楽ホール) にて、また火曜日にはリーガの「メンツェンドルフの館」で行われる予定である。「これは、私のスタジオの生徒たちの卒業制作です」と、クルーミニャ女史は言う。「絵画、報告、日本の伝統音楽です。日本の大東京の近郊にある、一橋大学から、私の知り合いの教官たちも参加しています。着物の展示や、日本を初めて訪れる人々のための作法についての話もあります。

さらに、私のところには完全にアニメに夢中になってしまった女子生徒もいます。アニメというのは、一種独特の麻薬です。また、教え子の中には、時間を無駄にしないよう、たとえばトロリーバスに乗っているときに、自分の髪を日本髪に結っている子もいます。これらの(彼女との) 出会いのときにはいつでも、伝統的な茶道が行われるのでしょ。

その伝統的な茶道においては、日本にとっては伝統的でない「パンケーキ」が出されるであろうことは付け加えておこう。しかしそこには、ラトビアと日本の親善を深める本当のシンボルを見出すこともできる。つまりところ、ラトビアと日本はほとんど隣人といってよく、我々の間にはロシア連邦「だけしか」ないのである。

<コラム>「勲章について」

先週、ブリギタ・クルーミニャに対し、長内敬・駐ラトビア日本国大使より旭日双光章が授与された。同章の叙勲は、日本政府が本年4月末、日本との関係強化に貢献した文化・学術分野に携わる65人の外国人活動家に授与することを決定したのに伴い行われた。ブリギタへの叙勲理由は「日本語教育、日本文化の普及と両国間の友好関係の強化への長年にわたる多大な重大な貢献に対し、同章を授与する。」となっている。ブリギタはラトビアで初の、日出ずる国の勲章の女性叙勲者となった。(了)

★★ラトビア映画「小さな泥棒たち」日本初上映★★

5月30日(日)と6月3日(木)「EUフィルムデーズ2010」において

毎年恒例 EU 主催の「EU フィルムデーズ 2010」において、ラトビアのコメディ映画「小さな泥棒たち」が日本で初上映されました。(残念ながら DVD 化されていません)

今年で4回目のエントリーとなるラトビアからは、世界各国の子供映画祭で大好評を博したアルマンズ・ズヴィルプリス監督の「小さな泥棒たち (Mazie laupitaji)」を上映。

2009年に製作されたこの映画は、公開後ラトビアで瞬く間に大ヒットとなり、ラトビア映画賞で監督賞、メイクアップ賞および観客賞を受賞。国内・海外あわせて35の映画祭からも招待され、数多くの賞を受賞したラトビア自信の新作映画です。(

「小さな泥棒たち」は、東京国立近代美術館・フィルムセンターにて5月30日(日)と6月3日(木)の2日間にわたり上映されました。会場ではオープン前から長蛇の列。私たちが到着する頃にはホールもすでに満員でした。(次ページへ続く)

ストーリーは、不況のあおりを受け失業した父親が、一家で銀行を訪れるシーンから始まりますが、物語が進み、主役である子どもたちのコミカルな表情、しぐさ、行動がスクリーンに映し出されるにつれて、場内は笑いの渦に包まれます。

日本の場合、コメディタッチの映画でも比較のおとなしく鑑賞される方が多いように思いますが、本作においては、分かりやすい内容構成と、テンポよい場面展開、そして子どもたちの体当たりの演技のおかげか、上映中は会場のあちこちで笑いが絶えませんでした。

シーンによっては拍手まであがり、さすが観客賞を受賞するだけの作品だと感心。全体を通して一体感のこもった映画上映となり、鑑賞後は心温かい気持ちに包まれました。

東京のほかには、福岡市総合図書館にて6月16日(水)と6月18日(金)の2日間上映。こちらも東京と同じように、大好評を得て終了したと聞いています。「小さな泥棒たち」は、子どもから大人まで気軽に一緒に楽しめる作品としておすすめです。

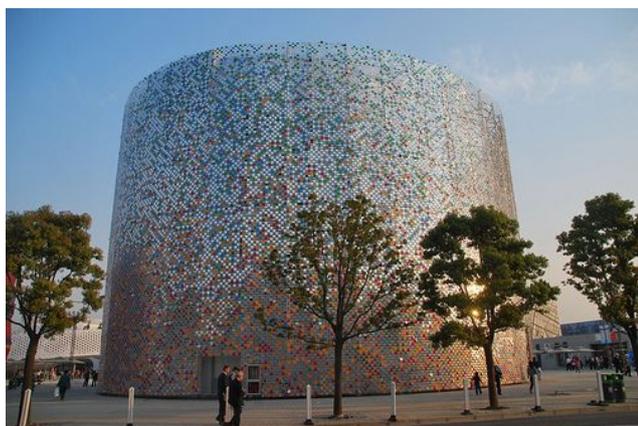


【あらすじ】

5歳の少年ロビスと姉のルイーザは、父親が失業し銀行のローン返済ができなくなったために家を追い出される。一家は母親の田舎に避難するが、英雄ゾロに憧れるロビスは、姉ルイーザを説得し、銀行に対して無謀な復讐を計画する。ふたりは銀行へ忍び込み、とんでもない方法で金庫破りを決行する・・・ふたりで力をあわせれば出来ないことなんかない！

★★2010年 中国・上海万博におけるラトビア★★

2010年 中国・上海万博におけるラトビア館のテーマは「科学技術革新都市(イノベーション・シティ)」です。ラトビア館はパビリオンCゾーンを中心に位置しており、エストニア、デンマーク、ギリシャ、ベルギー館に隣接しています。ラトビア館の広さは約1,000平方メートルです。



ラトビア館を通してみなさんに伝えたいメッセージは、「幸福への道は自然とテクノロジーの調和から生まれる」というコンセプトです。ラトビア館の外観は、10万個の色とりどりの透明なプラスチックプレート(15cm角)からできており、そのプレートが風にゆれ、きらきらと光を放つことにより、見る者に動的な印象を与えます。この外観は、森林・海・陸地・空・風などの自然の要素、多様性を象徴しています。

◦ Aerodium, Mailitis A. I. I. M. / www.latvijsexpo2010.lv

展示館の入り口付近には、上に続くらせん状の階段が配置されています。この階段は人類の絶え間ない発展を象徴しています。



© Aerodium, Mailitis A. I. I. M. / www.latvijaexpo2010.lv

らせん階段をのぼった先の3階には、風のトンネルが特設されています。このトンネルでは、”飛ぶ”体験をお楽しみいただけます。この装置はラトビアの会社 Aerodium によって開発されたもので、ラトビア館の目玉となっています。最新技術により、人類はとうとう比喩的な表現としてだけでなく、実際、言葉通りに”飛べる”ようになったのです。飛翔は、調和、幸福、そしてクリエイティブなエネルギーを体現しています。



© Aerodium, Mailitis A. I. I. M. / www.latvijaexpo2010.lv

ラトビア館を訪れた人は、館内にあるタッチパネル式のゲームに参加し、勝つことにより、3階に特設された風のトンネルを無料でお楽しみいただけます。またゲームに参加することにより、ラトビアについて興味深い知識をたくさん知っていただけるでしょう。

展示館の1階には、お土産ショップ、カフェ、そしてビジネスミーティングや各国の代表団をお迎えするための会議スペースが併設されています。

2010年 中国・上海万博は、引き続き2010年10月31日(日)まで開催されています。期間中に上海を訪れるご予定のある方々は、ぜひラトビア館に”飛び”にきてください!

※ラトビア映画「小さな泥棒」ならびに上海万博ラトビア館についての記事は、大使館のオルロフス・オレグス書記官に寄稿いただきました。

★ ラトヴィアの歴史 第2回 ★ (2回連載)

● **独立期** 20世紀にはラトビア独立の気運が高まり、第一次世界大戦後の1919年民族自決の原理に従って独立を勝ち取る。その後カールリス・ウルマニスを中心とする右派政府と赤軍の内戦を経て、民主主義体制での独立を確立。しかし世界大恐慌からの経済立て直しのために1934年にウルマニス独裁政権が成立、ソビエト連邦やドイツと不可侵条約を締結し政治的安定を図った。

- 1917~18 ドイツ、ソヴィエト・ロシア軍の侵攻 (第一次世界大戦)
- 1918. 11. 18 ラトビア共和国独立宣言 (革命によって崩壊したロシア帝国から独立し 共和国を宣言)
- 1920. 8. 11 ロシア・ソヴィエト連邦と平和条約締結 (リーガ平和条約)
- 「ヴェルサイユ体制」のもとで、エストニア・リトアニアとともに「バルト三国」と呼ばれる
- 1922 国際連盟加盟 1923 エストニア、ラトビア間で防衛条約。
- 1932 不可侵条約締結 1934 「バルト協商」成立 1934. 5. 15 政治クーデターでウルマニス大統領に
- 1939 モロトフ・リッペントロップ (ヒトラーとスターリン) 秘密協定締結 ポーランドを含む東欧、北
- 欧地域の勢力圏の分割に合意した。独ソ不可侵条約締結(8/23) バルト3国はソ連の影響圏に
- 第二次世界大戦 10/5 ソ連と相互援助条約締結

一口メモ : **ラトヴィア国旗の由来**



ラトヴィアの国旗は海老茶色・白・海老茶色の2色旗。

いわれは大変古く、あるラトヴィア兵士が瀕死の負傷を受け、白い布にくるまれた際、その布の両端が血で赤く染まった。この布が旗印として使われたという。この伝統に基づき、国旗がデザインされ、1921年に共和国国会で制定された。

● **第二次世界大戦とソ連の支配** 第二次世界大戦が始まると1940年にソビエト連邦とナチス・ドイツの間で交わされた独ソ不可侵条約の秘密議定書によりソ連に併合され、ラトビア・ソビエト社会主義共和国が誕生。翌年ドイツ軍が侵攻してきたが、ラトビア人はこれを「解放軍」として歓迎した。その後1944年にソ連に再征服される。この過程で、バルト地方のバルト・ドイツ人はロシア人によって一掃され、民族構成は一変した。

- 1940 ソビエト連邦、バルト三国を併合。
- 1941. 6. 14 最初の大量強制追放。
- 1942. 6. 22 ナチスドイツ軍ソ連に侵攻。(独ソ戦)
- 1944 ドイツ軍撤退、再びソ連軍侵攻。
- 1949 ラトビア人のシベリア大量流刑。(一説には数万人)

● **独立回復** 1980年台、バルト三国の中で、最も早くソ連からの独立運動が展開されたのはラトビアであった。1988年にはラトビア独立戦線が結成され独立運動が展開され、1991年1月のリトアニアのテレビ塔の流血事件(血の日曜日事件)と同じくラトビアでもソ連内務省特殊部隊の襲撃事件を起こす。その後のソ連のクーデター失敗後、ラトビアは独立を宣言した。

- 1985 ソビエト連邦共産党書記長にゴルバチョフ就任(ペレストロイカ提唱)
- 1986 人権擁護グループ「ヘルシンキ86」結成。
- 1988 人民戦線結成。
- 1989. 8. 23 バルト三国間の首都を結ぶ人間の鎖デモ(約200万人が参加)「バルトの道」
- 1990 ソ連崩壊 3月、共和国最高会議選挙。 5月、独立回復宣言。
- 1991. 1. 20 リガで「血の日曜日」事件。ソ連内務省の特殊部隊がラトビア内務省で発砲。(一般市民を含む6名が死亡)
- 1991. 8. 20 独立宣言(9/6 ソ連による独立承認)

その後ラトビア含めたバルト三国は、北欧資本の受け入れなどが積極的に行われ、ラトビアはバルト三国でも立ち遅れている感があるともいえるが、経済は比較的安定している。又国際関係では、2004年にNATOとEUに加盟している。しかし国内に3割弱を占めるロシア人との潜在的対立は、ロシアとの外交問題でもあり、ラトビアの政治に影を落としている。(1991. 9. 17 **国際連盟加盟**、2004. 3. 29 **NATO加盟**、2004. 5. 1 **EU加盟**)

一口メモ : **百万本のバラ**

「百万本のバラ」は加藤登紀子さんが唄って日本でも大ヒットしたが、元々はソビエトの歌。しかしラトヴィア語で作られたもとの詩があり、これは「マーラが与えた人生」として世に出ている。幸せ薄い母娘3代の人生を通し、民族の嘆き、いや抵抗の詩に曲をつけた歌なのだ。政治的な感じを抜きにしても心に響く歌です。「百万本のバラ」のロマンチックさも、「マーラが与えた人生」の慈しみも、どちらも「愛」の歌なのです。



★★不勉強でミスもあるかもしれませんがお許し下さい。お読み頂きありがとうございます。

付記：作成にあたり参考にさせて頂いたリソースは、フリー百科事典ウィキペディア、外務省資料、バルト三国の歴史(志摩園子著)他です。(益田信行 記)

池田裕子さん（関西日本ラトビア協会 理事）

東京のラトビア大使館を初めて訪れた時、戦前に日本で活躍したラトビア人として、関西学院で教えたイアン・オゾリンの他に、ヘルベルトス・ツクルスという人物がいたことを知りました。ヴァイヴァルス大使からその名をうかがった時、耳慣れない名前だったため、私には書き留めることすらできませんでした。後日、大使館のオレグスさんをご親切にスペルとカナ表記を教えてくださいました。ヘルベルトス・ツクルス (Herberts Cukurs)。それは、1936年から37年にかけて、リガー東京間の単独飛行に成功した飛行家の名前だったのです。

ツクルスに関心を持った私は、関西学院大学図書館で当時の新聞記事を探しました。その結果、彼の日本での歓迎振りを『東京朝日新聞』が詳しく報じていることを知りました。

ツクルスの名が最初に紙面に登場するのは、1937年6月2日付け朝刊13面です。「空の珍客 ラトヴィア勇士 けふ大阪へ」との見出しに続き、釜山からの電話情報として「東京目指して空の漫歩を続けてゐるラトヴィアの航空兵大尉ヘルベルト・ツクルス…」と書かれています。「ツクルス」とは笑ってしまいますが、もちろんツクルスのことです。

その日の夕刊は、この飛行家の羽田到着を伝えました。6月2日午後2時20分、羽田の東京飛行場に到着したツクルスを迎えたのは、ラトビアのハンター領事（神戸にハンター坂の地名を残す E. H. ハンターの息子ハンスが名誉領事を務めていました。ハンター領事についても、いずれご紹介できればと考えています）とグレアム副領事の他、数名の外国人でした。ツクルスがラトビアの首都リガを出発したのは前年11月20日だったそうですから、「途中で猛獣狩りをやったり見物をしたり甚だのんきな漫歩」と紹介されているのも頷けます。

羽田の飛行機格納庫前で、ツクルスは飯沼正明飛行士から花束贈呈を受けました。飯沼は、塚越憲爾機関士と共に東京朝日新聞の社機「神風」で同年4月6日に東京を出発、ヨーロッパ（ロンドン）までの最速飛行に成功した「時の人」でした（ロンドンまでの15,357キロを94時間17分56秒で飛行。正味飛行時間は51時間19分23秒）。故郷長野県安曇野市には飯沼飛行士記念館もつくられています。この飯沼の快挙との比較により明らかになるツクルスの偉大さは、操縦士と機関士の二役をこなしている点です。すなわち、自ら設計製作した低翼単葉のツクルス式C6型機を、自ら操縦し、自ら整備しながらのヨーロッパー日本間（機関士を伴わない）単独飛行だったのです。しかも、誰もが最速を争っている時代に、速さを競おうとはしませんでした。

愛機を置いたツクルスは、和風ホテルへの滞在を希望しました。東京の山王ホテルで長旅の疲れを洗い流すと、午後7時にはハンター領事と共に日本料理を食べに出かけたそうです。山王ホテルは現存していませんが、隣接して日本館があったと伝えられています。同ホテルは、その前年に二・二六事件の舞台となったことからご記憶の方もおられるでしょう。戦後長らく米軍の施設として使われていましたが、現在は取り壊され、跡地には山王パークタワーが建っています。

6月5日、逓信省、帝国飛行協会、東京朝日新聞社の共同主催により、羽田で航空ページェントが開催されました。6月3日から6日にかけての新聞は、160機（陸軍機80、海軍機15、一般民間機50、東京朝日新聞社機15）が参加したこの一大イベントの報道で持ちきりです。来日中のツクルスも愛機を繰って参加しました。その様子を6日の新聞から抜き出してみましょう。



「…やがてこの日の盛観に更に国際色を添ふべく特に交歓飛行を快諾したラトヴィアのツクルス大尉がやつて来て愛機の準備を始める。『日本の御好意は全く忘れることが出来ない』とこの好機会を得たことを喜ぶ様に頗る嬉しさうだ。ツクルス大尉が飛び上がると続いて飯沼、堀越両氏搭乗の『神風』長友飛行士操縦の『朝風』とがこれを追って舞ひ上がる、プログラムの最後を飾る快飛行三機入り乱れての妙技はこの日の十余万の大観衆をすっかり満足させた、朝風、神風、ラトヴィア機が続いて着陸車輪をぴたつと止めた時、啾唳たる『君が代』の楽の音が場内に鳴り響きメインポールの日章旗はするすると下ろされてゐる所であつた。機から降り立つたツクルス大尉も『君が代』の音にはつと直立して西の空に日章旗を仰ぐ時に三時四十五分…」。

<後編に続く>

『東京朝日新聞』1937年6月2日付け朝刊13面
「ツクルス大尉」は「ツクルス大尉」の間違い

★JTB・JAL バルト・ツアー★ 日本からラトビアに初の直行便が飛びました！

【ラトビア投資開発公社 2009 年の動きより抜粋】



【JTB・JALツアーのリガ空港での歓迎式典風景】

昨年8月4日、JALのジャンボ・ジェット機2機、すなわち、第一便282名、8月11日に第二便242名、合計524名がリーガ空港に飛来し、ルックJTB「バルト三国への旅」が実施されました。

ツアー参加者は、バスに分乗し、1週間にわたりバルト三国、ラトビア、エストニア、リトアニア観光を楽しみました。

両機ともチャーター便であり、成田空港からリーガに直行しました。日本からラトビアに直行便が飛んだのはこれが初めて、これほど大型の観光団が日本から来訪したのも始めて、その上、リーガ空港にとっても、商業便のジャンボ・ジェット機が飛来したのは今回が初めてのことでした。同空港は、本年滑走路を3,200メートルに延長したので、これが可能になったものです。

ツアーに合わせ、日本政府から本保観光庁長官を団長とする公式代表団が来訪し、カンパース経済相、ウシャコフ・リーガ市長、外務省 Stiprais 二国間局長、ラトビア旅行業協会代表と会談し、Grindeks 社、Rigas Piena Kombinats 社を視察しました。

リーガ空港においては、民族衣装を着た青少年が合唱、民族舞踊で歓迎、特産品数点のお土産が贈呈され、さらにはリーガ市による歓送会等が行われ、ラトビアが国を挙げてツアー一行を歓迎しましたが、これはツアー参加者一同に大きな感銘を与えました。

公式訪問団との会談においては両国間観光交流、経済交流の促進の方途につき意見交換が行われ、また、記者会見、午餐会、晚餐会等の席上ではこれらの発展に向け強い希望が表明されました。

【ラトビア経済、ビジネス機会、投資環境に関するご質問は、下記までお問い合わせ下さい】



★ラトビア共和国大使館 商務参事官
ドミトリス・ベロウソフスさん (Mr. Dmitrijs Belousovs)
住所：東京都渋谷区神山町37番11号プリマヴェーラA号室
TEL：03-3467-6888 FAX：03-3467-6897
Eメール：dmitrijs.belousovs@liaa.gov.lv

★ラトビア投資開発公社 日本コーディネーター
長塚 徹さん (Mr. Toru Nagatsuka)
住所：Investment and Development Agency of Latvia (LIAA) Perses Street 2, Riga LV-1442, Latvia
TEL：371-6703-9473 FAX：371-6703-9401 Eメール：toru.nagatsuka@liaa.gov.lv

【編集後記】 今年は5月に東郷名誉領事をはじめJLSK会員の皆様からラトビアを訪問されました。少しずつラトビアを体験する方が増え、その良さが語り継がれることでファンが増えていけばと願います。現地でお世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。今回先に現地入りし、記念式典などに合流された常務理事の上野さん(リガウッド・ジャパン)から、帰国された会員向けにいつものようにねぎらいのメールが届きました。本当にラトビアを愛され、その発展と日本との友好にパッションを燃やしておられる姿にはいつも感動をいただきます。その上野さんからのメールを一部紹介させていただきます。まだ未体験の皆様にもぜひラトビアの旅心を起こしていただきたい・・・

【事務局 金井】

「・・・無事関空に着かれたでしょうか？ラトビアに着いた時よりも、帰ってからのほうが時差の疲れがあるように言われます。今頃一番疲れが出ている頃では？しかし旅の疲れはいつか取れて、Rigaや北欧の楽しい旅の思い出だけは何時までも残ってくれると思います。又のお越しをお待ちしております。ご一行が発たれた日の夜はRigaは雨が降り、翌日から急に気温が下がりました。夜はコートを着て頭を帽子かフードで覆わなければ外出できないくらい寒いです。先週だけ特別にご一行を晴天で歓迎してくれたようです。Latviaは訪れる度に、違った顔で魅力を増して歓迎してくれます。これからもLatviaを宜しく願致します。(私の部屋からの、旧市街のいろいろな顔を添付します)・・・」

